

平成三年度

創立記念日式辞

式辞

昭和二十三年四月十五日今を去ること
 四十三年前のこの日に孤々の声を
 挙げ可部町四日市の今はなき
 高宮中学校の一角をお借りして
 広島県可部女子専門学校の第一
 回の入学式を教員四名、生徒十四
 名で挙行致しました。爾来この
 日を創立記念日として毎年式典
 を行い学園の建学の精神及び
 学園が今日まで歩んできた道を
 振り返り、初心に思いを致し、四五
 年間、教職員、学生、生徒の多くの
 人達が築き下された学風を偲び
 皆さんと共にこれからの指針への
 決意を新たにしたいと思います。

敗北した我が国は占領国からの天下りの民主主義の導入により国民の大方の者はこの民主主義の本義を正しく消化出来ないままに自分達の生活に性急に取入れられた。その結果、日本古来の伝統的な精神や徳性が失われ、日本女性の最も美德とする謙虚優雅心の強さ、逞しさを備えた姿は、何処へか消え去り、自己中心主義、唯物主義、享樂主義、刹那主義に走り、道徳は地に墮ち、社会は混乱の極に達してしまつた。これを目撃した私は新生日本の基礎として、眞實に徹した堅實なる女性の育成こそ

急務であると考へ、永年積み上げて来た女子教育の体験を生かし、再興日本の一翼を担おうと固い決意と不動の信念のもとに立ち上つたのであります。

社会の正常なる発展は帰するところ人であり、本学園の教育指針は、この人づくりであります。社会環境の欠陥や忌むべき社会風潮に惑わされることがなく、如何なる苦難にも挫けることなく、強く正しく明るく生き、抜く力を養ひ、世界に誇る麗わしい日本女性の美德を身に付け、社会の浄化進展に役立つ人材の育成が、本学園教育の根本理念であります。

斯した建学の精神に基く人材の育成の機関として先づ広島県可部女子専門学校を設立せられた。昭和三十三年に広島県可部女子高等学校家庭科を新設せられた。同三十四年には商業科を、三十七年には普通科を増設。更に学園発足当初からの計画であった、地域社会の文化の向上の一翼を担うため、高等教育機関の設置に踏み切り、先づ昭和三十七年に可部女子短期大学を被服学科から発足せられた。三十九年には食物栄養学科、食物専攻、食物栄養専攻を増設。続いて翌四十年には国文学科、英文学科の

二学科を増設。更に四十二年には時代の要望に応えて、四年制の大学を新設し、文学部国文学科、英文学科の二学科を設置したのであります。この時校名を広島文教女子大学と短期大学も高等学校も広島文教女子大学短期大学部、広島文教女子大学附属高等学校と改称せられた。その後文学部の完成年度の四十五年を以て短期大学部に幼児教育学科を増設せられたので、短期大学部は五学科、二専攻となりました。四十六年度には幼児教育学科の研究施設として附属幼稚園を新設せられた。尚附属高等学校では社会の情勢に

呼応して四十七年から家庭科商業科を廃止し普通科一本とし専ら大学高
校の一貫教育を目指したわけであり、母
校祖とも云ふべき広島県可部女子専門
学校は三十七年度に発足した可部女子
短期大学の母体となった。この発展的解
消となり三十七年度に廃校致しました。
教育に生き、教育に死するの信念の
元に七十年間この道一筋に歩み続け
来た私の第一歩は小学校の教員で
あり、期間は一カ年で、たけれど幼児
期、児童期の教育の重大さを身と
持てて体験して来たので、幼児や
児童の指導者の養成機関を是非設
けて立派な教員を養成して地方に

送り出したい。そうすることは本学園
出発時の目的を一層強化すること
なると信じ、昭和五年六年に初等教育
学科を創設致しました。かくして本学園
は日本の伝統的精神並に徳性の
高揚は元より新時代に即応し得る
知性を有する女性の育成に努めると
共に地方文化の向上に寄与してまい
りました。特に大学に於ては高度の研究
能力と理解力を備え、知性と徳性を
兼備する女性の育成に努め、定員を
守りながら教授陣容を充実させ、研究
と教育を十全たらしめるべく、万全を期
した教育方針が大方の高く評価を
得ることになり、広島県は元より中国

四国・九州、近畿の全域から本学の學子
 風を慕って誠實にして礼儀正しく向學
 の意欲に燃えた學生が集つて奮興して
 おります。ここに大学院創設の氣運が
 醸成され昭和六十一年度から文學研究
 科の國語學・國文學専攻修士課程の
 設置認可を受け、引続き、六十二年度
 には教育學専攻修士課程の設置認可
 を受けました。本年三月には第四
 期目の修了生が巣立ち、それ以外の
 目標に向かつて努力しております。
 建学の精神に添いながら時代の要
 請に即応すべく情報化社会に対応し
 得る女性の養成を目指して大型の
 情報機器も導入し、その教育の徹

志を期すもと共に大學教育の個性化を
 増進し生涯學習の場として大學機能
 の拡充に努め、地域文化研究所並かに
 教育研究所の開設、更に教育機器、
 美術教育指導センター、教育相談
 センターの設置等更に國際交流の
 重要性に着目し先ず近隣諸國の
 友好からと考え韓國の全州教育
 大學、中國の大連外國語學院との
 姉妹縁組を締結し教育研究の交
 流に努めております。
 又、生涯教育時代に即応して社会人
 入學の制度も創設しております。
 本年度十五名の者が入つております。
 更に短期大學部から文學部へ編入試

験を実施する等広く門戸開放に努めておきます。その上、文学部短期大学の部の各学科に亘つて少くとも二以上の資格が取得出来るように文部省より各学科の設置時に認可を受け、おろいで卒業単位だけに止まらず努力すれば斯うた資格が取得出来る道も開いているのであります。現在本学園には大学院、大学、短期大学、高等学校、幼稚園の五部門の教育機関があります。この五部門の機関を学んでゐる現在の院生、学生、生徒、園児の総数は二千四百七十名であります。そうしてこの四十三年間に社会に送り出した卒業生の総数は一万七千六百六十二名で

あります。又全学園の教員、教は専任一三名、非常勤八七名、職員、四五名、斯うた大勢の教職員が打つ一丸となり本学園の建学の精神に則り和協一致なごやかな家庭的雰囲気の中をそれぞれの部門に於て、学生、生徒、園児達を健やかに立派に成長させようと懸命の努力を続けて下さつて下さることに對し深く感謝致しております。次に校地、校舎の変遷の概要を申し述べますと、最初申しました学園出発時に校舎を可部町四丁目にあつた高宮中学校の一角を借用したのは学園出発時に校舎として安吉市町に求めていた建物を可部町に移築

する期間がながった為、移築するまでの
臨時措置として三月間の約束で
借用したのであります。ところが開校
一週間に於て私が病魔におそわれ入院
加療の身となつたので、巴むなく開校
三月後の七月に安古市町の校舎に
移転しました。そうして二十八年八月には
可部駅に隣接していた元中原校舎で
あった校地校舎を購入して二十九年四月
に学園発祥の可部町へ戻つて来た
のであります。それから三十一年に高等
学校新設地としてこの川向うの現在
広島市安佐市民病院の敷地となつて
中島地区に三万六千三百平方米の校
地を求めて、そこに移り七年間に

亘つて高校、短大の校舎、体育館、講
堂、寄宿舎合わせて一万四百二十八平方米
の校舎群をつくりました。次に文学部
新設に当り、この上原の地に五万二千
八百平方米の土地を四十年に求めて
文学部棟と建造したのであります。が、
その後短大一号館、二号館、図書館
寄宿舎もこの地に移し、ご覧のように
諸々の施設も完備致しました。
ここで中島校地のことについて一言申し
添えておきます。この中島校地は、我が
武田学園教育の拡充強化発展の
為に重要な校地校舎であると共に、
あの土地あの建物には私の魂の一つ一つが
打ち込まれてゐる。私に取つては命にも

代え難い大切な大切な土地であるので可部町からの譲渡の申し出をお断りしつづけたのでありますが、最終的には地域の社会福祉の爲にと考え、決を呑み断腸の思いをして昭和四十八年十月に譲渡に踏み切ったのであります。その後高校は五十二年九月から五十五年九月までの三十五年間、この大学校地内に仮移転していたのであります。が五十四年に大学寮の上の風光明媚な丘に約三万平方メートルの土地を求め、ここに五十五年九月校舎二万二千八百平方メートルを建築してこの新校地校舎に移りました。五十八年にはこの高校各地の隣りに二千八百平方メートルを買収し、ここに

テニスコート及びテニスコートのハウスを造りました。それから二年後の六十年にはその土地に高等学校創立三十周年の記念事業の一つとして公認試合の出来る立派な弓道場を建造しました。目下是等の設備も有効に使用しております。尚五十八年には大学校地内に創立三十五周年の記念事業として鉄筋七階二千三十八平方メートルの本館棟を建築しました。これは大学院の教室、大会議室、研究室及び大学事務局としております。六十年には音楽棟三階建二四九平方メートル、又公認プールも完成しました。六十三年度には大学寮四階建二七〇

平方米の新築と旧館一号館二号館
 の改築も完成し各室の備品も一段と
 完備し遠隔地より本学の学风と
 慕つて親元を離れて来る学生達に
 安心と喜びと希望を持って生活出来
 るように致しました。又同じく六十一年度
 に八五四平方米の高校寮を同じ内容
 で建造しました。尚平成二年一月
 総合教育研究棟鉄筋六階建
 五六二一平方米、統つて同年四月首には
 鉄筋三階建二二五八平方米の美術棟
 を建立しました。総合棟には初等教
 育学科の教室、大、中講義室並びに
 大型コンピュータ、ムム等の完備した
 機器を備え学生の授業に自由研究

にと有効に活用しておられます
 斯様に施設を備の拡充強化整備に
 おいても出来るだけ力を入れ、学生
 生徒、園児達の日々の学問研究に学
 習に将又心身の鍛錬に教育効果を
 挙げて行きたいと考えて努力してお
 ます。以上で学園建学の精神並びに
 教育方針と創立から現在に至るまでの
 経路の概要を申し述べたのでありますが
 この四十三年間の歩みは決して順風一路の
 道ではなく紆余曲折多事多難な道を
 辿つて来ました。私は前述の如く創立
 一週間にして病魔に襲われ、また
 そうして生死をさまよつたこと一々年
 奇蹟的にも死線を越え九死に一生を

得て退院はしませんでしたものの病気が重い脊柱カリエスなので仲々床を離れることが出来ずベッドを教員室に持ち込みギブスベットの中心に仰臥のまま九年間学園の終堂をしてきました。漸くして病床を離れ再起と喜んだのも束の間、昭和三十三年四月三十日漏電の為火災にあい、漸く充実完備に近づいた学園の校舎校具の大半を焼失して終い元の振り出しから再出発と云う有様になりました。長い斗病生活の直後であったので精神的ショックも大さうござい、また昭和四十年に再び脊柱カリエスに見舞われ床に伏すること半年、四十五年には教職員組合からの激しい

攻撃を受けた関係か精神過労と作り心臓を患い入院加療又一二年、その入院中の九月二十四日中島校舎で再び火災に遇い、これ又中島校地に於て最初に建築した一号楼を焼失し又々物心共に大きな打撃を受けました。如何なる悲運に叩かれても、艱難汝を玉にするの訓えの如くすべては天の試練と考え七転八起、只管初志の貫徹に全生命を捧げ、努力に努力を続けて参りました。お蔭で現在では元気で学園当初からの理想であり宿願であった大学院から大学、短大、高校、幼稚園と一貫した教育機関の設置も果され、微力ながらも新生日本の女子

教育の一翼を担う事の出来ており
 ますことを深く感謝してゐる次第で
 あります。それは勿論一人だけの
 努力でなく四十二年間過去現在に
 亘り本学園にお務め頂いて来た
 教職員の方々が渾然一体となつて

本学園の建学の精神をよく体し
 之に沿うてそれぞれの立場に於て
 我を忘れ本学園教育の為にお尽し

下さいました。お蔭で本学園顧問であり
 下さいます。このように本学園教育の爲にお尽し頂きたい
 先生方の中には漸逝去逝した方が現在五十八名おられます。
 武田学園では斯うに佛教者の方々をおまつりする恩報堂を
 建造してあります。平素ここに安置申し上げおれませぬ年創
 立記念日の記念式を奉仕する方に法要を営み追善供養をしており
 此は佛教者の師生共の功績に対し深く感謝の意を表す意味で
 あります。

宮澤喜一先生の陰に陽に御指導
 御援助下さいました賜物であり
 元理事故神原秀夫氏から長年に
 亘り物心共に多大の援助を受けて
 来たこと、常石鉄工株式会社からの
 御協力更には過去現在の理事、
 評議員の方々の御指導御援助及び
 過去現在の学生生徒園児の保護
 者の方々卒業生の皆様との直接に
 間接に多大の御援助御協力を賜り
 ましたお蔭であります。尚在学中の
 学生生徒の皆さんの愛校心の深い
 ことも大きな力となつてゐるのであります。
 今日からの本学園の歴史を作り
 学風の向上にあたるのは、この一堂に

会してゐる私達であります
 茲に創立四十三周年を迎えるに当り
 本学園の建学の精神と学園の
 歴史の概要を述べ過去現在の諸先
 生方並びに本学園に多大の御援助
 御協力を賜りました方々に対し深く
 感謝の誠を捧げ謹んで厚く御礼
 申し上げます次第であります 尚学生
 生徒の皆さんには本学園の歴史と
 伝統を再認識して頂いて之に沿つて

この上とも益々勉学に学問研究に
 人格陶冶に共々に勵志ことを誓ひ
 合いたいと思ひます
 以上を持ちまして意義ある今日の
 式辞といたします

平成三年四月十五日

学校法人武田学園

理事長 武田 ミキ